あしぱっち vol. 29

ワウラ語で 地の精霊

[ご住所等ご変更ございましたらご連絡いただけますと幸いです。]

特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体 Rainforest Foundation Japan

〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-8-20
TEL : 03-5481-1912　FAX : 03-5481-1913
MAIL xingu@rainforestjp.com　HP www.rainforestjp.com

HOW TO HELP

年会費		
	大人	5,000円
	18歳以下	3,000円

年会費・寄付金振込先

口座名	熱帯森林保護団体
ゆうちょ銀行	郵便振替口座 00140-3-144187
三井住友銀行 東京中央支店	普通口座 7066247

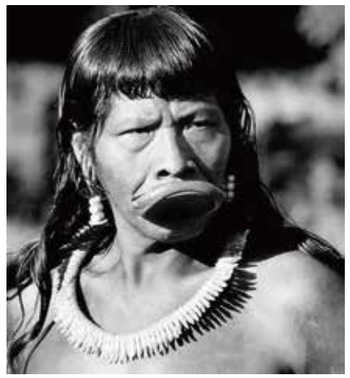
※ 銀行振込の方は、必ずお名前とご連絡先を別途、当団体までご一報をお願い致します。

■ 「どこいくの」を真剣に考える

1年前から計画した「どこいくの」展は2020年6月に無事開催し、約300人のご来場があり盛況に幕を閉じ安堵しました。まさかコロナ禍で世界中が覆い尽くされるとは想像もしていませんでしたが、去年アマゾンで体験した森林火災の危機感がコロナへと繋がっていたのでしょう。先進国の力を持っている民は、自然の法則を無視し、金勘定で自然の恵を収奪し、野生生物の生態系をズタズタに壊し、物質的に便利、速さ、効率が良き事のように消費を誘導しているように私は映ります。PC、スマホというツールは両刃の剣で、いとも簡単に人間を烏合の衆にしてしまいました。コロナ感染は支援対象地域のシングーにまで及び、旧知の仲だったイアラピチ族の偉大なる族長アリタナもコロナに倒れ旅立ってしまったことは悲しいです。次世代のためにも、彼の志に報いるよう、支援事業を継続していきます。ほぼ同時期にカヤポ族長老ラオーニも体調を崩し町の病院へ搬送されましたが、コロナ感染ではなくほぼ回復し、今は集落で養生しています。ラオーニの存在はカヤポ族のみならず、先住民の光ですので、まだまだ元気に活躍することを祈っています。

8月初旬、広島の原爆記念碑の前に立ち、そこから見える原爆ドームまで75年という歳月が経ったにもかかわらず、人類が歴史から何も学んでいないことに愕然とし、広島で生まれ育ったRFJひろしま代表の敏子さんに「原爆投下を日本人は忘れてはいけないよね」と言ったら「いや日本人だけでなく人類は」と返された言葉が胸に刺さりました。

この星で起こる出来事を決定している立場の、心ない人々の意志により、人災、天災も含め常に一般市民や弱者が犠牲になり、心ある人間が良識ある方向を示すエネルギーすら削がれる危うさを覚えます。怖い時代です。しかし諦めたらそれまでです。アマゾンと向き合い30年以上経ちますが、己の無力さを感じつつも、アマゾン支援活動という具体的な行動を通し、多くのことを学んでいくよう精進します。
そして多くの方に今から「どこいくの」と真剣に問いたいです。（南 研子）



若かりしころのラオーニ
*森を守るたたかいの人生

[報告] アマゾン先住民族と新型コロナ禍

下郷 さとみ（RFJ外部協力スタッフ／ジャーナリスト）

新型コロナ禍が深刻なブラジル。8月中旬には累積の感染者数が316万人、死者数が10万人にも達し、収束が全く見えない状況です。2月のカーニバル休暇後に欧州旅行帰りの大都市富裕層から始まった感染は、その後、都市貧困層や地方都市へ、またアマゾン先住民族コミュニティへと拡大を続けてきました。当団体の支援対象地であるアマゾン南部シングー川の上流～中流域の現状についてご報告します。

■ アマゾン先住民族コミュニティで広がる新型コロナ禍

シングー流域では4月以降、頭痛や発熱、咳、下痢などの新型コロナ感染症を疑う症状が広がり始めました。大方の人は幸いにも軽症のまま快復していますが、当団体の支援対象地では、これまでにヤワラピチ民族の村で4名、カヤポ民族のひとつの村（カポト村）で1名、感染が確認された後に亡くなりました。感染拡大のピークは過ぎたと思われるものの、まだ収束には至っていません。

流域の諸民族は4月始めに保護区の境界線を封鎖して人の出入りを止めました。また消防団事業の本部拠点のあるカヤポ民族のピアラス村では、近隣の町までの距離が40キロと近いことから、村人たちは森の奥の別の村や新しく開いた野営地に緊急避難を行いました。ただ、封鎖したとはいえ人の行き来を完全には止められず、ウィルスが持ち込まれてしまったようです。村人たちは森の様々な薬草で飲み薬を作ったり、煮出した液で沐浴したりして治療と予防にあたっています。保護区内には政府が設置した診療所が複数あり、看護師などの医療スタッフが常駐すると共に巡回医療も実施されていますが、特効薬のないこの病気では彼らの伝統医療が大きく役立っているようです。

なお当団体では現地からの要請を受けて、カヤポ民族の緊急避難に必要な燃料などの費用や、シングー上流域の村々に酸素ボンベと吸入器を配置するための費用の一部を緊急支援しました。

新型コロナ禍が教える自給自足の暮らしと保護区の森を守る重要性

先住民族全体では、8月13日までに全国256民族のうち146民族の間で感染者が2万4561人、死者が667人に上りました。データからは被害が深刻なコミュニティの2つの特徴が見えてきます。ひとつは、自給自足が壊れて町の物資や雇用への依存度が高いこと。保護区の面積が小さく自給自足が成り立たない、町に近くブラジル風の生活様式の浸透が進んでいる、などの理由が挙げられます。町への依存度が高い村にとって村の封鎖は飢えに直結する事態になりかねません。

もうひとつは、保護区の森への不法侵入者―高級木材の違法伐採業者、金の違法採掘人集団、密漁者など―が多い地域です。たとえばヤノマミ民族の保護区には2万人以上の金採掘人が違法に活動しており、彼らによってウィルスが持ち込まれました。保護区の診療所にコロナに感染した金採掘人が助けを求めて来て、そこから大きなクラスターが発生したと言われています。

当団体の支援対象地で、他の地域と比べてコロナの被害が抑えられているのは、自給自足の暮らしがまだ守られていること、そして保護区の森に不法侵入を許さないという彼らの結束と実効的な取り組みがあるからだと言えます。アマゾンの最後の砦のようなシングー流域の保護区の森と人々の暮らしを守らなければならないと、このコロナ禍に思いを新たにしました。

コロナ禍においても消防団員と養蜂士たちは頑張っています！

シングー中流域でカヤポ民族とジュールーナ民族の若者たちが取り組む消防団事業。乾期終盤の9月～10月に行われる焼畑の火入れの季節に合わせて今年も防火活動が予定されています。自分たちが食べる物は自分たちで作る。パンデミックであろうが、村人たちの営みに変わりはありません。6月～8月には3ヶ月をかけて保護区境界線の監視活動が行われました。深刻な被害に苦しむ他の地域のような状況に陥らないためにも、監視活動による不法侵入の防止・摘発がとても重要です。シングー上流域でマチプ、カラパロ、ヤワラピチ、アウェチ、クイクルのそれぞれの民族が取り組む養蜂事業では、いま蜂蜜の収穫の最盛期を迎えており、養蜂士たちはハチの世話や蜂蜜を搾る作業に忙しくしています。今年はいずれの事業も現地視察には行けませんが、彼らと連絡を密に取り合いながら事業を進めて行きます。

保護区境界線の監視活動に参加する消防団員

カラパロ民族アイハ村の養蜂士たち

■「どこいくの」私・あなた・アマゾン

松田 ナオミ (ムウ・アトランティス・ファクトリー)

2018年8月アマゾンのジャングルへの2万キロの旅に同行してから半年ちょっと経った頃、研子さんからコラボでアマゾンをテーマにアート表現をしよう！と誘われ、お互いにRFJ30年、MWアトランティス40年、積み重ねてきた過去を振り返るのではなく、これから先、何処にそして何に向かって行くのか、全ての私達に問いかける！を表現しよう！とスタートした『どこいくの』展。主要メンバーで何度も会場の下見、ミーティングを重ねてカヤポボディーペインティングの布と映像と立体で大きな会場をアマゾンに仕立て上げてゆくことになりました。

チームリーダーの研子さん、具体的に物づくりしてゆくヒロちゃん、映像ケイちゃんなど先輩たちはフリーランスで世の中に媚びること無く独自のスタイルで歩き続けてきた人たちで肝っ玉が座っている。そこに若手映像作家も加わり、私にとって初めての大きなディレクションと世代を超えたチーム。この半年はまるで未知の国を旅しているようで、プロセスを楽しみ想像力をフル回転させてゆくと、遠いジャングルの精霊さんやラオーニたちがグンッと背中を押してくれて一歩づつ前へ前へと進んでゆきました。20名近い若者達も搬入設営に参加してくれすべてのメンバーがなくてはならない一人一人でした。

思いを形にするということは、感じたら考えて想像して行動し、プロセスを重ねて諦めずにやり続ける。しかも楽しんでゆく。すると結果は形となって現実になる。それぞれの好奇心と諦めない思いが繋がって積み重なって今日になり明日になる。6月10～14日の5日間のための半年のプロセスは私にとって本当に大きな宝物で沢山の学びの時間でした。コロナ禍でこのタイミングしか無いと言う会期に来場くださった方々にも会場のバイブレーションは伝わっていたと手応えも感じました。

そして経済優先の人類の欲望が自然を壊し世界中のネイティブな人々の生活を追い詰めている現実と、2018年にセスナから見たジャングルの緑の偉大さ尊さを改めて思い、これ以上地球の緑を奪ってはならないと深く思います。『どこいくの』展は終わったけれど私たちそれぞれの『どこいくの』はスタートしたばかりです。

■「どこいくの」展に参加して

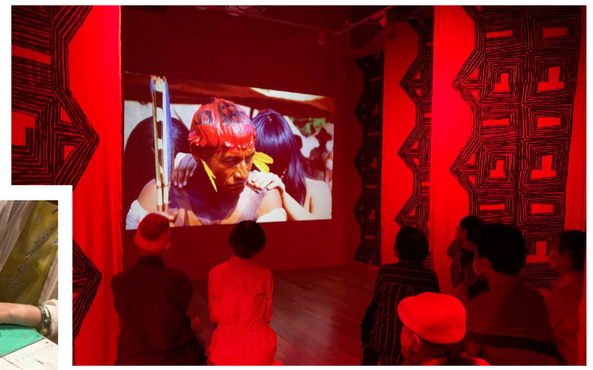
成田 ヒロシ (アトリエ光と風)

RFJ30周年×MWアトランティス・ファクトリー40周年のイベント「どこいくの」制作スタッフとして天王洲アイルへ会場の下見に行った。3部屋、およそ90坪の広さと高い天井、無機質な空間の中でイベント会場のイメージを考えた。素朴な材質で立体的な空間を作りたい、来場した人が自由に楽しめる場を作りたい、と思うと同時に会場やタイムスケジュールを考えると、いつになく気が引締まる思いだった。それからおよそ半年間、スタッフと何度も会場でミーティングをし、みんながイメージを具体的に作っていった。試行錯誤を繰り返しながらの素材探しは楽しい時間だった。ナオミさんの布を使った映像コーナー、2面の壁に映写する映像を制作するスタッフ、照明スタッフ、音響スタッフ、裏方さんの制作スタッフ、会場制作隊。研子さんからは自由に考えて、自由に作ってとシンプルな言葉。初めて出会う人との初めてのコラボ。みんながそれぞれのポジションで動き出す。

TVのニュースはコロナばかり。イベント中止が相次ぐ中、開催に向けて躊躇なく進んでいく主催者の言葉に迷いがなく心強かった。「どこいくの」の制作は順調に進んでいった。会場入り口には見上げるほど大きなラオーニに出迎えてもらい、光の門をイメージして板切れに蛍光色を塗り、カラフルなテーブル、ベニヤ板を切り抜いた植物、アマゾンの映像、布のジャングル、巨大なコラージュ、太陽のオブジェ、RFJの活動報告パネル、インディオの家マローカ、うねる巨樹、日常生活品などの展示物で会場は構成され、来場者が裸電球に照らされる。会場に流れるインディオの歌声。会場を一巡して出口横のテレビ画面からは世界中の人が笑顔で、子供も大人も、それぞれの国の言葉で「どこいくの」と語りかける。たくさんの人と出会えたこと、いつか森の精霊に出会う旅を始められそうな予感に溢れたイベントに参加できて感謝しかありません。

「どこいくの展」2020年6月10日~14日
T-ART HALL

コロナ禍の中、300名以上の方にご来場して頂き、
盛況のうちに幕を閉じることができました事、感謝いたします。



※2019年度の会計報告はRFJのホームページをご覧ください。